

ベルネ覚え書

小野寺直樹

ライプツィヒの著名な出版社ブロックハウスから発行されていた文学新聞 (Blätter für literarische Unterhaltung) に、スイスの作家ケラー (Gottfried Keller) がベルネ (Ludwig Börne) についての論評を寄せている。掲載された日付は1848年7月14日で、ケラーはこの時まだ29歳であった。彼がチューリッヒ州政府の奨学金を得てハイデルベルク大学に留学するのは、この年の9月のことである。そのハイデルベルク大学で、ケラーはフォイアバハの哲学講義に接することになる。

1848年といえば、もちろんフランスの2月革命、ドイツでは3月革命の年であるが、スイスにおいては、いわゆる分離同盟戦争によってその前年末にすでに近代国家の幕開けに成功していた。祖国の統一と近代化に積極的に行動した青年ケラーは、引きつづき1848年にヨーロッパの各国に巻き起こった革命の嵐に、感激と興奮で心をふるわせたのであった。ことに、関係の深いドイツの3月革命の成り行きには、彼は強い関心を抱いていたに違いない。この小論に取りあげたベルネ論は、ケラーのそのような革命への強い関心を吐露したものであり、その点で、短かいながら最も好意的なベルネ論の一つであって、ベルネの愛読者にとっては、一読してまことに胸のすく思いのする文章である。以下に、まずその冒頭を引用してみよう。

「ベルネという名前は、今日その名も高まる中で、名誉回復を迫ってわれわれの心胆を寒からしめる人たちの一人だ。ベルネがまだこの世に生きていてくれたら、今日、一方にはルイ・フィリップス、メッターニヒそれに連邦議会を想定し、他方には、彼らに対するベルネを配する、ただそれだけでわれわれのまぶたには、いずれは書かれる最も壮嚴な政治喜劇の舞台が演じられることになるのだ。それにしてもまさにこの時にこそ、ベルネのような作家がいないということは、何としても痛恨のきわみである。今日、この複雑かつ多様な世上にあって日々のジャーナリズムの活動を見るに、精力的であっても精神がともなわず、あるいは逆に精神は認められても実行力に欠けていたり、なかには精神も実行力も備わっているものがあるにしても、そこには芸術的な価値が見あたらないし、百歩ゆずって万一このような価値が汲みとれる場合があるとしても、素朴さと正義を失っていることは確実である。然り、まさにこの

小野寺直樹

えもいわれぬ素朴さ、この純粹無垢な正義愛こそが、今日はなほだしく欠けていることなのだ……少しはベルネを見ならったらどうなのか？ベルネがここに居合せたら、彼はきっと為になるお説教をしたことであろう。」

1837年に、祖国ドイツの革命を夢みながらついに果さずに第二の故郷パリでこの世を去ったベルネ、そのベルネが今ここに生きていてくれたら、という悲痛な思いは、なにもケラーに限ったことではないだろうが、ケラーの場合は、次第に先細りして一年も持たずについに挫折してしまうドイツ革命の行く末を注視しながら、じたんだ踏む思いで慨嘆しているだけに、より一層の重みがそこには感じられて、われわれの共感を呼ぶものではないだろうか。ベルネが革命の年まで生きのびていれば62歳のはずである。この位の年齢ならば、その当時でも十分に期待できたことである。1832年5月27日のハンバッハにおけるドイツの統一と自由を要求する大集会に、最も信頼すべき指導者の一人として招請をうけてパリから駆けつけた46歳のベルネが、文字どおり熱狂的な歓迎のあらしにつつまれたように、62歳の老ベルネも、パリの2月革命の生なましい朗報を何よりの手みやげにして、足どりは16年前にも劣らぬ軽やかさで、今こそドイツのために、ドイツの民衆のために余生を捧げんものと馳せ参じたことであろう。ハンバッハの祭典のころから熱烈な共和主義者であったベルネが、フランクフルト国民議会で、ゲーテが生まれ、自分が生まれ育った故郷の町で、しかもあの屈辱にみちたゲットーではなく、全国民の、否ヨーロッパ中の関心を集める檣舞台上、一体どんな役者を演じたであろうか？生来のきまじめと正義感に老いの一徹が加わって、それこそ大見えを切るほどの大変な見せ場をつくったかも知れない。

しかし歴史はさにあらずで、3月革命とベルネの出会いは現実のものとはならず、しかも革命そのものも早期に挫折し終息して、ドイツは決定的に、政治的にはヨーロッパの後進国になってしまうという歴史的事実に立ちかえるとき、「今あのベルネが生きていてくれたら、」というケラーの言葉は一層痛恨の度を深めるばかりである。ケラーのベルネ論からもう一度引用してみよう。

「……フランス人の愛情と敬愛のもとに、ベルネはかの地（パリ）で葬られたが、こちら（ドイツ）では、健康で快活なドイツ人すべての熱狂のなかに彼は生きつづけており、明るく輝く星のように、ベルネはライン河の真上でわれわれの日々を照し出している。そして彼の言葉は、日を追ってより深く、一層あざやかに人々の心をゆり動かしているのである。その反響がすべての人の心にゆきわたるまでは、両国民（ドイツとフランス）のどちらも心安まることはないだろう。」

ベルネの遺体はパリのペール・ラシェーズの墓地に埋葬されたが、その日（1837年

2月18日)は生憎の天気だったにもかかわらず、会葬者は三千人を数えたということである。参列者の一人で、当時パリに亡命中のドイツの自由主義者ヴェネダイ (Jacob Venedey——3月革命後のフランクフルト国民議会議員)は、フランスの共和派の領袖ラスパイユに先立っておこなった追悼演説のなかで、次のように述べたということである。「……………彼は生涯休むことなく戦ってきたのです。それも彼を理解しなかった国民のために、彼を評価することのできなかつた国民のために、彼が安らかに夢みることのできるほんのわずかの土地とてない祖国のために戦ったのでした。しかし、彼はよその土地でも気楽なことでしょう。なぜなら、彼は人類そのものの代表者であったので、誰もが彼の同胞であり、世界が彼の祖国だったのですから……………」このヴェネダイの追悼文を先に引用したケラーの文章と読みあわせるならば、そこにベルネの生涯かけて歩いた道筋がおのずから判然としてくるであろう。それは、フランスとの友好の上に立ってドイツの統一と自由を求めつづけたということであった。「パリだより」(Briefe aus Paris)をはじめとする彼の文筆活動の多くは、事実そのための手段であったといってもよい。その限りでは、ベルネは作家活動よりは政治的・社会的行動を重視した。しかし、このような姿勢のなかから産みだされた彼の作品は、劇評でも、書簡形式(事実書簡そのものなのだが)でも、あるいはその他の散文でも、その時どきの急速に進展する近代社会の断面を鋭利なナイフで切っただけでなく、それぞれ特有のにおいまで匂ってくるようで、いまだ新鮮さを失わず、読むものを引きつけて離さない。ただし、ベルネの見せてくれるのはすべて断面であって、ブランドス (Georg Brandes) の指摘するとおり、じっくり想を練った上での長編などはあくまで無縁である。1828年にハンブルクのカンペ書店から、それまでに書いたものを全集として出版することになったとき、それに関する文章のなかでベルネは次のように書き出している。

「わたしは、最もつまらない、もしくは最も下らない事がらをとり上げて、本気に大らかな気持ちで話そうと思ってきた。しかし、自分の著作についてまじめに語るなんて、わたしにはそんなことはできない。カンペ氏ががわたしの書いたものを集めておって、しかもそれらを全集にするというのである。カンペ氏がそのうち本当にそんなものを印刷することにでもなれば、わたしは何て恥ずかしいことだろう。わたしは一つも作品を書いたことはなかった。わたしはただ、あれやこれやの紙上にペンを走らせてきたに過ぎない。今度これらの紙が集められ、重ね合されて、造本の結果本の体裁になる——ただそれだけのことである。」

思うに、ベルネはドイツにおける最初のジャーナリストの一人として、みずから自

覚しそれに徹したということであろう。とはいっても、それは主として1818年から以後のことである。この年はベルネにとって文字どおり第二の人生を踏み出した年であった。それは三つの要素を持っている。その第一は、ジャーナリストとして徹するためにもあって、それまでのユダヤ名のユダ・レーヴ・バルーフ (Juda Löw Baruch) からドイツ名のルートヴィヒ・ベルネに改名したことである。第二には、ユダヤ教からキリスト教に改宗したことである。ユダヤ教に関しては、ベルネはもともとそれを深く信仰していたわけではなく、むしろそれを嫌悪すらしていたようである。それではこの改宗にはさして問題はなかったのかということになるが、ベルネは無神論者ではなかったにせよ、無神論者のハイネ (Heinrich Heine) がその7年後に、いわゆる「ヨーロッパ文化への入場券」を求めてキリスト教の洗礼を受けたことと、ベルネの場合もある程度は同じ性格を有していると見た方がいいのではなからうか。ドイチャー (Isaac Deutscher) の「非ユダヤ的ユダヤ人」(岩波新書) でもそのような指摘がなされている。

さて、残る一つは独立のジャーナリストとして、最初の雑誌を編集発行したことである。雑誌の名前は「ディ・ヴァーゲ」(Die Wage) で、秤とか均衡を意味し、それはまた調和にもつながると考えられる。ベルネはこの雑誌の創刊に際しての文章で、その性格について述べながらこの雑誌への意欲のほどをのぞかせている。「市民生活・科学・芸術」の論評、とりわけその三つの神聖な統一を旗じるしに、幅広い内容を目指すと同時に、唯一の党派性のない雑誌として、公平な編集方針のもとにあらゆる意見に耳を貸すことを宣言している。この雑誌は4年間で着実な評価を得て終刊することになるが、後年、1830年9月にパリに移住してから、「Die Wage」と同じ意味のフランス語で「ラ・バランス」(La Balance) という名前の雑誌をベルネは発行している。

ここでまたケラーのベルネ論に戻ろう。ケラーはベルネの熱心な愛読者であった。とりわけ、彼はベルネの書簡を好んでいたようである。それにしても、ケラーがドイツとフランスの友好を基本とするベルネの考え方に共鳴していたことはいうまでもない。上述のベルネの雑誌の名称の意図するところが、ケラーはスイス人の立場から、隣接する両大国ドイツとフランスの間の友好・均衡を願うものであることを、当然ながら明確に見抜いていた。このベルネ論は、もともとは、その前年の1847年に出たベルネの全集 (Leipzig, Kori 刊) の第17巻目と、遺稿集 (Mannheim, Bassermann 刊) の第3・4巻の書評の形式をとっているのであるが、前者はベルネのフランス語による作品のドイツ語訳が含まれていて、ケラーはそのドイツ語訳について全体の半分位

の紙数を当てている。そのなかで、ベルネと愛国思想との関係について興味ある引用をしているので少し紹介してみることにする。

「ベルネは自分ではこれまで、愛国思想のまぬけ者になったことは一度もなかったといっているけれども、しかし、ベルネのそうした告白の本当のところは、次のような言葉によってはっきりして来ようというものだ。

『一国のエゴイズムは人間一人のそれより罪が軽いとでもいうのだろうか？正義は他国民に相對したとたんに、下らないものになり下がってしまうのだろうか？正義から見離された祖国に、背を向けることも禁じるような国の栄光なんて、』しかし、ベルネが諸国民を一緒くたにしているわけではないことは、次のようなことから明かである。

『ブルジョア社会の古ぼけた建物をこわすのはフランス人の役目である。ドイツ人の役割はそこへ新しい建物を造り上げることだ。自由のための戦争では、いつもフランスが諸民族の先頭に立つだろうが、しかし将来の、ヨーロッパの全民族が相集う平和会議では、ドイツがその議長をつとめることになるだろう。

フランスとドイツの歴史は、数百年このかた、おたがいに相寄り、相手を理解しあい、一緒に一つの国に溶けあったりという、ただ一つの絶えざる努力の連続だけである。これまでおたがいに知らんぷりしているなどということはいつも不可能であった。両国は憎みあうか仲よくしあうかであったし、兄弟のようになるか戦争をしあうかしなければならぬのである。……

両国の年長者たちは、フランス・ドイツ双方の若い世代がおたがいに交遊しあい、尊敬しあうように努めるべきではないだろうか。』

愛国思想については、ベルネの最後の作品「メンツェル」(Menzel, der Franzosenfresser)においてより詳しく取りあげられているが、そこでもメンツェルのような偏狭な、排他的な愛国思想に対して、特にフランスを念頭において、国際的な視野に立った考えかたを、ベルネは繰り返しかえし披瀝している。まさに国際的センスをゆたかに持ちあわせた第一級の国際人といっていいたいだろう。前出のドイチャーの書のテーマにされているように、そのことはベルネの場合も当然ユダヤ人であることと深く関わっている。

それにしても、冒頭に述べたように、ケラーのベルネ論が掲載された日が7月14日、つまりフランス大革命の記念日であったとは、故意か偶然かははっきりしないけれども、ベルネにとってはこの上なく名誉なことであつたらうし、さらには、ケラーのベルネ論そのものも、ドイツ近代文学の一断面をみごとに語っている珠玉のエッセイの

小野寺直樹

一つとして、一層味わい深く今後も読みつがれていくことであろう。

〔引用文献〕

Ludwig Börne, in: Gottfried Keller. Aufsätze zur Literatur, herausgegeben und kommentiert von Klaus Jeziorkowski, München 1971.

Börnes Werke, ausgewählt und eingeleitet von Helmut Bock und Walter Dietze, Berlin und Weimar 1964.

Ludwig Böne. Sämtliche Schriften, neu bearbeitet und herausgegeben von Inge und Peter Rippmann, Darmstadt 1964—1968.

(おのであら なおき 本学助教授 ドイツ語)